

MIC広島フォーラム2020アピール

多くの人の命と日常が一瞬にして奪われたあの日から、広島は75回目の夏を迎えた。惨禍を生き抜いてきた被爆者の高齢化は着実に進む。あの日、広島で何が起こったか。心身の傷や後遺症がいかに自身を、家族を苦しめたか。その体験を肉声で聞ける機会が少なくなる中、被爆地ヒロシマの体験の継承は喫緊の課題である。

あす8月6日の「原爆の日」を前に、私たちは「MIC広島フォーラム2020」を開いた。テーマは「被爆75年 日韓、新たな交流へ」。韓国の原爆被害者を救援する市民の会広島支部の豊永恵三郎さんに、被爆体験をはじめ在韓被爆者の支援のあゆみや韓国・大邱市の被爆者団体との交流のあり方を聞いた。日韓関係は常に不安定要素がつきまとうが、ヒロシマの被爆者と市民は隣国の被爆者たちと強固な絆を築いてきた。被爆者はどこにいても被爆者であり、国境はない。ヒロシマの惨禍を二度と繰り返さないために、私たちにできることは何か。世界中の全ての人たちが自らの胸に問い掛けなければならない。

核超大国である米ロ両国の対立は深まり、冷戦の転換点になったとされる中距離核戦力（INF）廃棄条約は失効した。核兵器の近代化が進み、中国も軍事力を増強する。「戦争のために原子力を使用することは、犯罪以外の何ものでもない。人類とその尊厳、倫理に反する」—。昨年11月、被爆地の広島と長崎に立ったローマ教皇（法王）フランシスコは、核兵器の保有・依存からの脱却を訴えた。国際情勢が混沌とする中、全世界に核兵器廃絶に向けた行動を求めた。

核兵器のない平和な世界を構築するために、今必要なのは国境を越えた市民の連帯である。被爆者の体験を過去のものとして、次世代に伝え続け、市民社会の中に核兵器廃絶のうねりをつくることだ。それは、メディアの担い手である私たちの使命でもある。

2020年8月5日

MIC・広島フォーラム参加者一同